

ワークショップ

自由意志の現在——ストローソンの「反応的態度」再考

オーガナイザ :

海田大輔 (京都大学)

提題者および題名 :

山口 尚 (京都大学、大阪工業大学) 「ストローソンの遺産」

岡村太郎 (京都大学) 「『道徳能力』の実質化」

梶本尚敏 (京都大学) 「Dennett meets Strawson」

「自由意志と決定論」の問題は古くて新しい。それは、長い考究の歴史をもつ一方で、つねに最新の学術的知見をふまえて再考されている。本ワークショップでは、P・F・ストローソンの道徳的責任論の鍵概念である「反応的態度」に着目して、この問題に取り組む。

ストローソンは、有名な論文「自由と怒り」(1962)において、決定論は私たちの「責任実践」を脅かさない、と主張した。彼によれば、従来の哲学者たちは道徳的責任と決定論の問題を理知的なレベルで考察することに終始し、責任実践がもつ情動的な側面を適切に把握しなかった。怒りや感謝などの反応的態度が織りなす自然な人格的關係が責任実践を成り立たせている点に気づけば、例えば決定論が道徳的責任へもたらす脅威を過大視するような誤りを避けることができる。——これがストローソンの主張の骨子である。

この論文は公刊以来さかんに論じられ、「ストローソン派」と呼ばれうる一群の哲学者を生み出した。しかし、ストローソンの立場の正確な理解——あるいは「より生産的な」理解——がどのようなものであるかについては、いまだに明らかとはいえない。本ワークショップでは、「ストローソンをよりよく理解する」をスローガンに、自由や道徳的責任をめぐる彼の見解の可能性や限界を見極め、その優れた点を抽出することを目指す。その際には、「道徳感情論」や「自然主義」などがキーワードになるだろう。